

安全を配慮した柔道学習指導法の研究

足利市立第三中学校 椎名 弘

はじめに

古い歴史を持つ国には、それぞれの民族の歴史的流れの中で育ってきたいくつかの格闘的技術が体系化され近代スポーツとして、継承されている。わが国の柔道も日本の歴史の流れの中で育ってきた格闘技術をその伝統的形式を重んじながら、内容を近代化したスポーツ文化である。したがってその指導にあたっては、相手を制すという格技の本質や特性を十分生かすと同時に格闘そのものが持つ危険性の排除に対する配慮が必要である。また他のスポーツと異なり、個人で相対する、個人を制するという目的達成のために多くの対人的技術とスポーツとしての安全技術がある。安全の技術は各個人が技能として身につけ習熟していかなければならないが、相手を制するための対人的技術を学習するすべての個人が習熟することは難しい。そこで、各個人の特性を生かした、対人的技術のプログラムが必要となる。

次に学習内容を考えていく場合、学習内容と授業内容と授業時間および個人と社会の必要という立場から学習内容の精選化も重要な要素となる。以上述べた格技の特性、内容構造を考えた学習指導法、安全、事故防止などを中心に研究をすすめてみた。

1. 格技の本質と特性

(1) 本質「徒手または、用具」を用いて相対する個人が、打つ、突く、なぐる、ける、投げる、おさえる、出すなどの攻撃と、それを防いで攻撃に転ずる技術によって勝敗を競う。

(2) 特性

ア 対人的競技である。

- 攻防一致の技術が強く要求される。
- 個人が個人の技能を活用して勝敗を競う。

イ 礼儀と公正な態度が必要である。

ウ 安全のための技術が設けられている。

2. 柔道の本質と特性

(1) 本質「徒手で組み合った相対する個人が、投げる、おさえるなどの攻撃と、それを防いで、攻撃に転ずる技術によって勝敗を競う。」

(2) 特性

ア 徒手で組み合った、相対する個人が、勝敗を競う競技である。

イ 礼儀と公正な態度が必要である。

ウ 礼儀は日本の生活様式に適応した形式がとられている。

- 相対する相手は、つねに自分の未熟を指摘して導いてくれる。

エ 安全のための技術が設けられており、特にその習熟が必要である。

- 技能の発達（体位と体力の発達との関連）段階に応じて安全に対する

安全を配慮した柔道学習指導法の研究

足利市立第三中学校 椎 名 弘

はじめに

古い歴史を持つ国には、それぞれの民族の歴史的流れの中で育ってきたいくつかの格闘的技術が体系化され近代スポーツとして、継承されている。わが国の柔道も日本の歴史の流れの中で育ってきた格闘技術をその伝統的形式を重んじながら、内容を近代化したスポーツ文化である。したがってその指導にあたっては、相手を制するという格技の本質や特性を十分生かすと同時に格闘そのものが持つ危険性の排除に対する配慮が必要である。また他のスポーツと異なり、個人で相対する、個人を制するという目的達成のために多くの対人的技術とスポーツとしての安全技術がある。安全の技術は各個人が技能として身につけ習熟していかなければならないが、相手を制するための対人的技術を学習するすべての個人が習熟することは難しい。そこで、各個人の特性を生かした、対人的技術のプログラムが必要となろう。

次に学習内容を考えていく場合、学習内容と授業内容と授業時間および個人と社会の必要という立場から学習内容の精選化も重要な要素となる。以上述べた格技の特性、内容構造を考えた学習指導法、安全、事故防止などを中心に研究をすすめてみた。

1. 格技の本質と特性

(1) 本質「徒手または、用具」を用いて相対する個人が、打つ、突く、なぐる、ける、投げる、おさえる、出すなどの攻撃と、それを防いで攻撃に転ずる技術によって勝敗を競う。

(2) 特性

ア 対人的競技である。

イ 礼儀と公正な態度が必要である。

ウ 安全のための技術が設けられている。

2. 柔道の本質と特性

(1) 本質「徒手で組み合った相対する個人が、投げる、おさえるなどの攻撃と、それを防いで、攻撃に転ずる技術によって勝敗を競う。」

(2) 特性

ア 徒手で組み合った、相対する個人が、勝敗を競う競技である。

イ 礼儀と公正な態度が必要である。

ウ 礼儀は日本の生活様式に適応した形式がとられている。

・ 相対する相手は、つねに自分の未熟を指摘して導いてくれる。

エ 安全のための技術が設けられており、特にその習熟が必要である。

・ 技能の発達（体位と体力の発達との関連）段階に応じて安全に対する

技術内容がルールとして規定されている。

エ 競技にあった独特な用具を着用する。

オ 柔道衣を着用する。

カ 相手を制する技術は、投げ技、おさえ技、が中心となる。

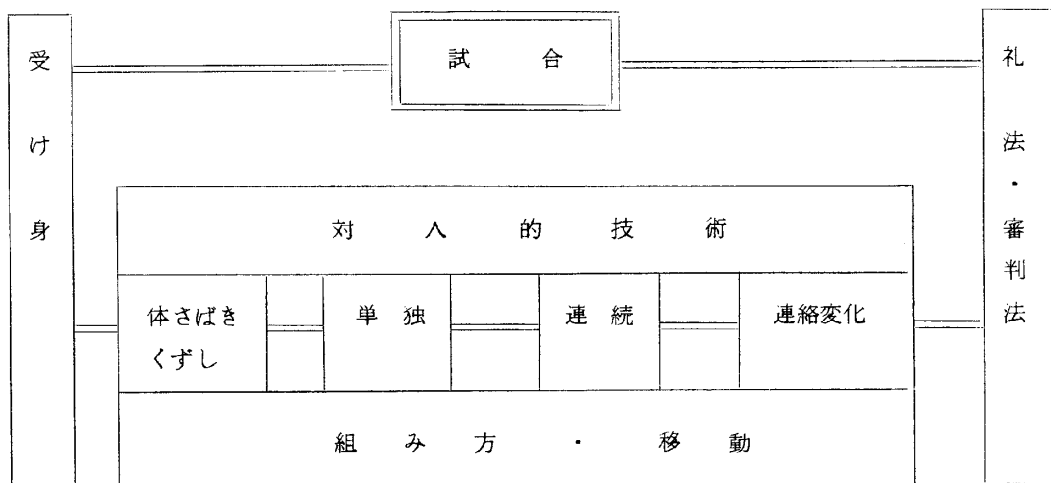
オ 体力の要素が強く要求される。

キ 筋力、瞬発力などの体力要素が強く要求される。

3 ねらい

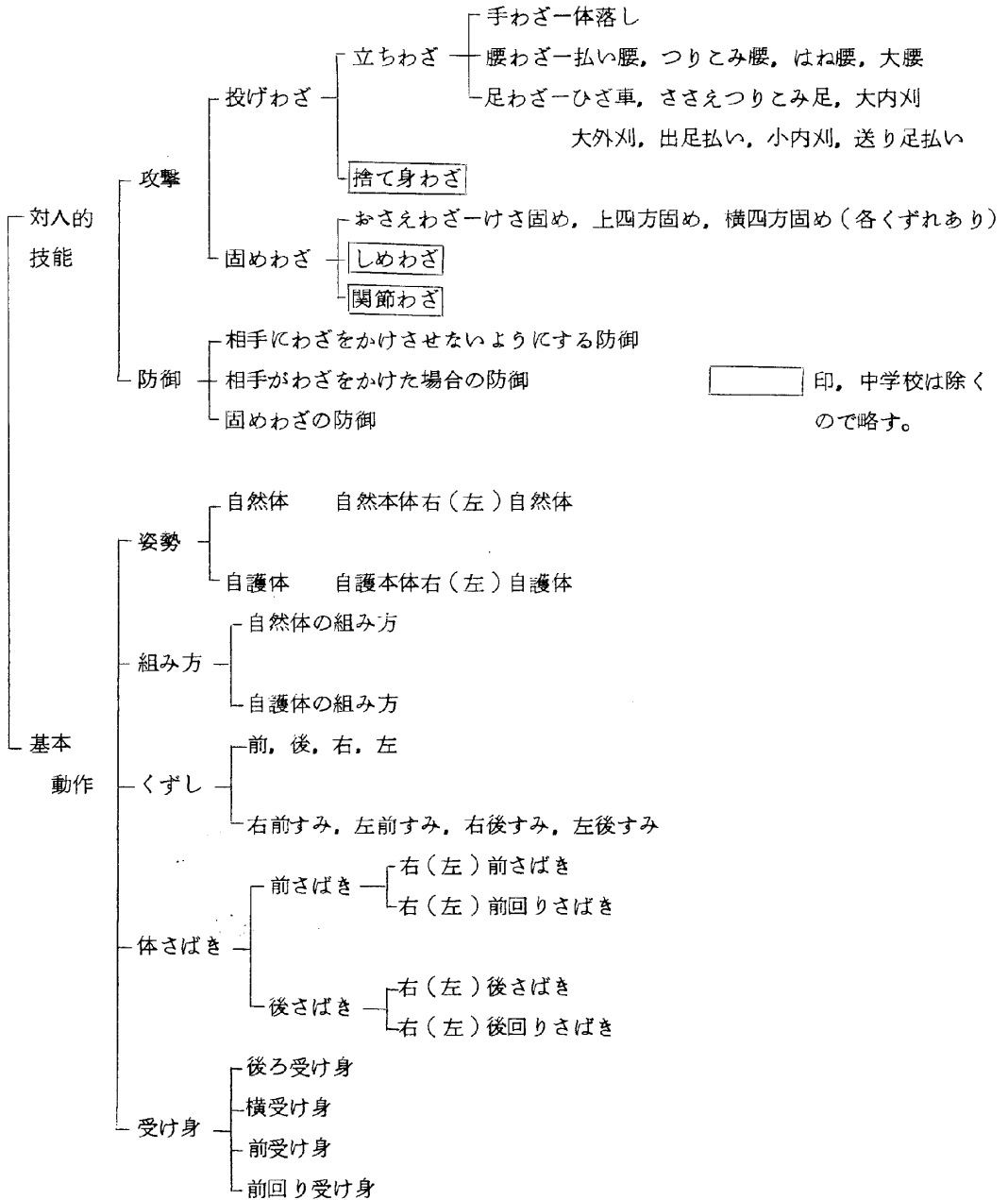
1 年	2 年	3 年
<ul style="list-style-type: none"> 基本動作や対人的技術（単独や連続）を知り、自分に適した技術を身につけ、それを用いた試合ができるようにする。 	<ul style="list-style-type: none"> 対人的技能（単独や連続）の範囲をひろげ、攻防の技能として生かすことができるようにする。 	<ul style="list-style-type: none"> 自分に適した対人的技能を連絡変化させ相手の変化に即応して活用できるとともに正規に近い試合ができるようにする。
<ul style="list-style-type: none"> 自分の技能を知り、具体的な目標を立て、班で自主的に協力しあい計画的に練習や試合ができるようにする。 礼儀正しくお互いの人格を尊重しあい、練習や試合における約束を守れるようにする。 柔道の学習に適した準備運動（補強運動も加味）や整理運動を班で協力しあい自主的に行えるようにするとともに、服装、爪、練習場などの安全と清潔を確めあい、禁止事項を守って安全に練習や試合ができるようにする。 		

4 技術構造



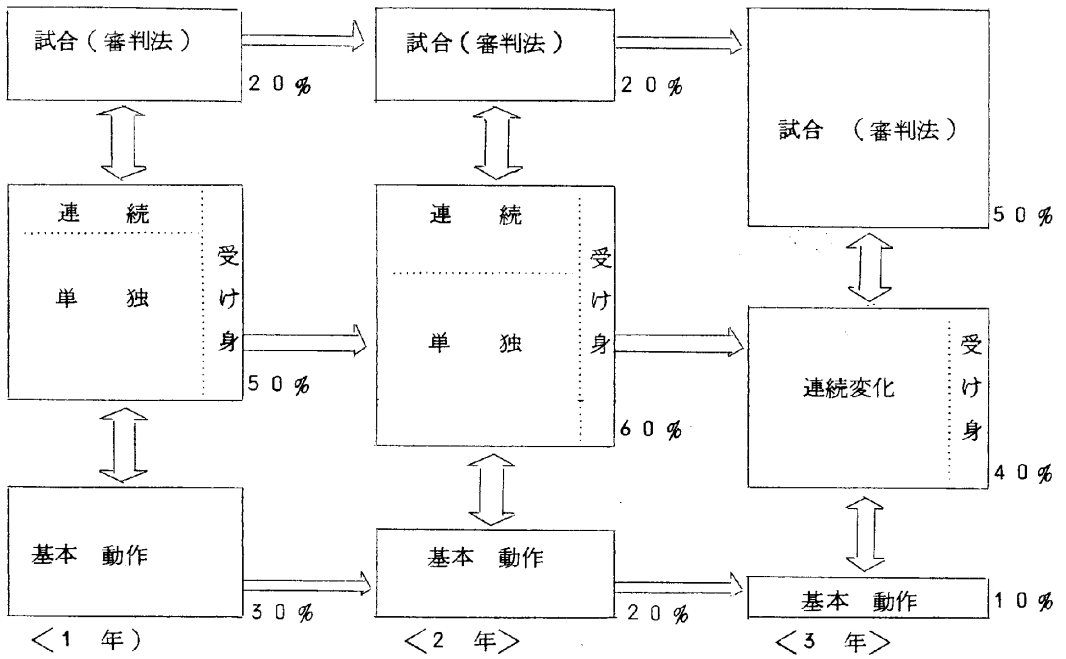
技術構造では、組み方、移動、くずしと体さばき、などを対人的技術として構造化してみた。理由は、柔道が対人的競技であるからすべての技術が対人的関係において生ずると考えたためである。しかし、技術的にみると基本的であるから以後は基本動作として取り扱っていくようにする。

5 技能構造

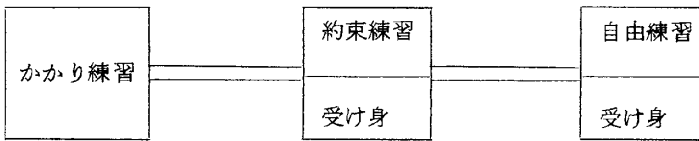


6 学習過程

(%は約)

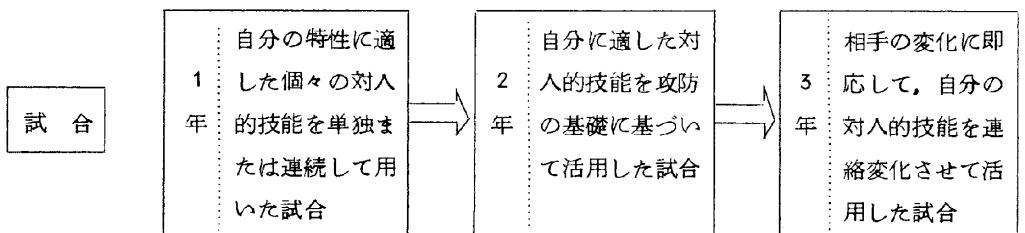


◎技の学習過程



指導要領では、「初歩的段階」「やや進んだ段階」にわけているが、基本的動作、対人的技能、試合の割合は示していない。そこで、上記のように1年は、基本的動作と対人的技能に、2年は、対人的技能を中心に、3年は、連続変化と試合にウェートをかけた学習計画を立てている。

7 学年別技術



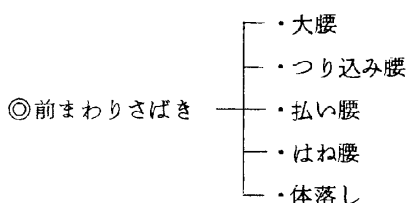
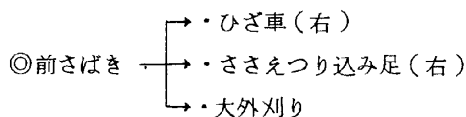
1 年

(1) 基本動作

- ・ 受け身〔・後ろ受け身 ・横受け身(左右の受け身) ・前回り受け身(左)〕
- ・ かまえ〔・姿勢と礼儀 ・組み方〕
- ・ 移動〔・継ぎ足 ・歩み足〕
- ・ くずしと体さばき〔・八方向かたのくずし ・右(左)足前さばき ・右(左)足後ろさばき
・右(左)足前回りさばき〕

(2) 対人的技術

ア 投げ技〔()内は右組右技としての体さばきの足〕



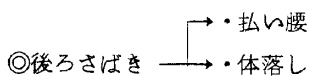
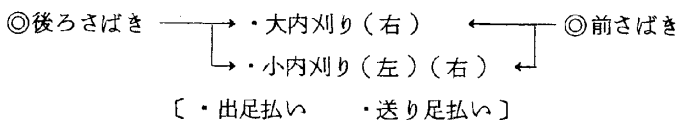
イ 固め技

- ・けさ固め ・くずれけさ固め
- ・上四方固め ・くずれ上四方固め

2 年

(1) 対人的技術

ア 投げ技



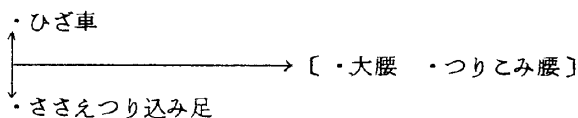
イ 固め技

- ・横四方固め ・くずれ横四方固め

3 年

(1) 対人的技術

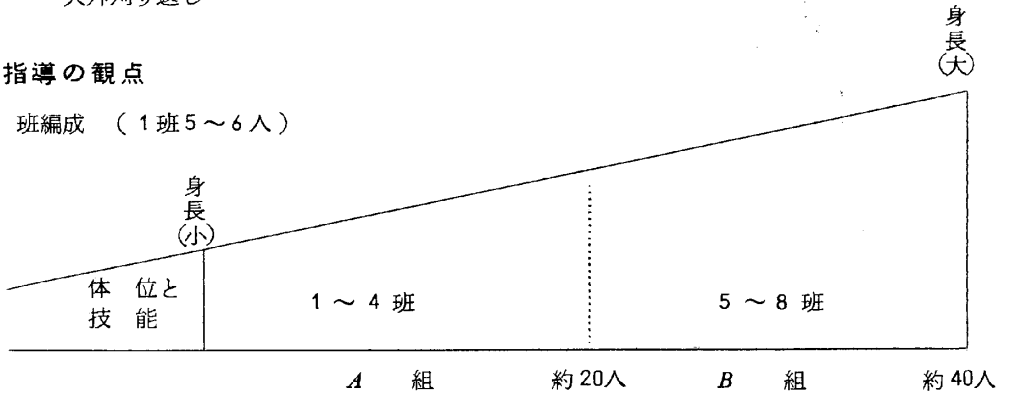
ア 投げ技



- ・大内刈り → 体落し
- ・小内刈り → つりこみ腰
- ・大腰 → 払い腰 → つりこみ腰
- ・小内刈り → 横四方固め
- ・大外刈り → けさ固め
- ・大外刈り返し

8 指導の観点

(1) 班編成 (1班5~6人)



(2) 指導の基本

- ア 基本動作、対人技能とも「知って」→「形ができる」までは一斉指導、習熟した段階から個別指導させる。
- イ 対人技能は1~2年ですべて学習させ、自分の体位や体力などの特性から通した技術を特に習熟させる。
- ウ 対人的技能は、個々に指導せず、体さばきと結びつけて同時に指導する。
- エ 自習練習に審判をつけて、技の効果を判定させ、審判ができるよう慣れさせる。
- オ 対人的競技という特性を生かし、できるかぎり対人で学習させる。

9 事故の現状と原因

スポーツの事故発生数は、スケート、野球スキー、体操、柔道、相撲などの順といわれ柔道についての件数は左の表のとおりである。(49年度)

種目	総件数	事故の程度				事故の原因			
		死亡	軽傷	医師治療	入院治療	不可抗力	施設の欠陥	指導者の過失	本人の過失
柔道	81	0	33	40	8	59	1	5	16

「体育・スポーツの事故と対策」

第一法規出版KK 昭和50年8月10日発行

早川芳太郎著

その発生部頻度は肩峰突起打傷、膝関節捻挫、鎖骨骨折、肘関節

脱臼、脳震蕩、肋骨骨折が比較的重度のもの、また部位に関係なく、捻挫、肉ぎれ、骨折、脱臼の順である。また発生状況は初心者の方が経験者より多く、投げる方より投げられる方が多く、練習より試合が多いといわれている。

しかし、こうした現状は柔道の技術構造や練習形態、競技方法がようやくスポーツ化したとはいってもなお武術的要素を多分に内包していることや今日の青少年の体力の発達内容の低下、実施施設の不備、指導能力の低下などによるといわれているが、ここでは専ら指導者の立場から事故防止対策について考えてみたい。

10 事故防止のための留意点

柔道では、互いに相手の身体を制する技能を中心として行われるので、事故が生じやすい。したがって、事故が生じないような学習指導上のくふうが必要になる。

中学校の柔道における傷害をみると、前述のごとく、骨折、捻挫、挫傷、打撲などが多くなっている。これらの負傷を身体の一部別にみると、鎖骨、肘関節、肩関節、足関節、膝関節、手や足の指、腰などに多く、負傷のおこしやすいわざとして、背負投、体落とし、大外刈、足払い、内股、固めわざ、巻き込みわざなどがあげられている。

これらの事故は大部分投げられた者が多く、投げる者のわざの未熟と投げられた者の受け身の未熟さが重なって生じている場合が多い。

(1) 技能構造と事故

前述の事故を技能構造との関連でみた場合、どの面に問題があるかを考察してみると、

ア 投げわざの場合

投げわざの技能は、①姿勢→②組み方→③移動動作→④くずし→⑤体さばき→⑥わざのかけ→⑦投げ→⑧受け身という構造になっており、このうち⑧は投げられた相手が安全に身体を処する技能である。この技能の中で事故をおこしやすい箇所は、⑦→⑧の経過においてである。すなわち、投げと受け身の技能がともに未熟で、わざが不正確なために受け身がしづらい状態の場合である。

次は⑥→⑦の場合で、不正確なわざのため、相手が投げられるよりも倒れるような状態になったりわざをかけた者が未熟で自分からつぶれてしまう場合である。

⑤→⑥の場合は⑤の技能が不十分なうちに⑥の動作に入った場合におこる負傷が多い。

3つの場合をあげてみたが、なんといっても⑥→⑦と⑦→⑧の動作中の事故が多く生じているが、投げわざの技能構造上からは、④→⑧までの個々の動作が正確にできるとともに、④から⑦までが一連の動作として行えることが事故防止の基本条件である。

イ 固めわざの場合

固めわざの場合は、投げわざよりも事故をおこす事例は少ない。

固めわざの技能は、①入り方→②おさえ→③防御という構造になっている。事故の多いのは、②→③の動作中である。たとえば、けさ固めのとき、相手の首を強くおさえたときに相手が逃げようとしてブリッジの状態になったり、四つんばいになっているときそれを攻めているときなどである。

攻める方は、①→②の関連動作が確実にできること、防ぐほうは、相手が②の動作に入る前の防御

と、②に入ってから防御がしゅうずにできるようになることが、事故防止の基本といえる。

(2) 事故防止のための指導の留意点

実際の指導の流れに即してより具体的に考察してみると、次のようになると思う。

ア 指導前における留意点

- (ア) 生徒の健康状態の観察（心臓病など疾病のある問題生徒は握）
- (イ) 爪をきったり、身体を清潔にしておく。
- (ウ) 身体にあった柔道衣を着用する。
- (エ) 柔道場の安全を確かめる、畳の破損や、すき間の有無を確かめておくこと。

イ 指導中の留意点

- (ア) 学習内容やその学習活動のしかたについて十分理解させるとともに、練習中のマナーについても徹底しておく。
- (イ) 準備運動や受け身の練習を十分行わせる。単独練習だけでなく、わざの指導とも関連させた練習をくり返しやらせる。
- (ウ) 基本動作や対人的技能は分節的に練習させて、その要点を十分身につけさせる。また基本動作が十分生かせるような対人的技能の練習が必要である。そのためには「かかり練習」や「約束練習」による指導に重点をおく。「自由練習」は、わざのかけ方や受け身に相当習熟した段階で無理なく行うようにする。
- (エ) 力に頼るわざや粗暴な行為は事故の原因になるし、負けまいとする態度もわざを不正確にし、禁止わざを犯しやすくなるので、事故を起こしやすい。
- (オ) 試合は十分な練習の後で行い、わざを制限したり、ルールを緩和したり、生徒の能力に応じて行う。
- (カ) 正しい防御法と共に、正しくかかったわざに対しては正しく受け身をするという態度も必要で事故を防ぐ。

ウ 指導後の留意点

- (ア) 身体を清潔にするとともに、けがをしたら、ただちに手当てをしておく。
- (イ) 頭部や腹部を打ったり、腕をねじったりした場合は、できるだけ早く医師の診断を受け、適切な処置をとるようにする。

11 安全確保のため特に配慮する事項

(1) 学習の進度を体力や技能程度に合わせる。

生徒の発達段階に応じたものにする。たとえば1年生の場合は、ゆるやかな進度で学習させ、体力の充実と技能の進歩に応じて適宜早めるようにする。

(2) 単純な動きのわざから指導する。

単純な動きのわざといっても人によってその判断が違おうが、くずし、体さばきが比較的簡単なわざということ、わざそのものについても単純な動きから複雑な動きへと順を追って指導する。

(3) 実施時期や柔道場の広さに合った計画を立てる。

柔道をはじめて指導する場合は、春から秋にかけての温暖な時期がよいが、他の種目との関係でそういかない場合が多いので、冬季に実施する場合は同じ指導時数でも、季節のよいときと比較して、同じ学習効果は期待できない。また柔道場の広さによっても学習計画が左右される。40人の生徒を対象とする場合120畳と60畳では、学習効果に大きな差がでることは当然である。季節と柔道場に合った安全計画を立てる。

(4) 安全に対する生徒の判断力を養う。

安全に対する指導は、留意事項や禁止事項として教師から一方的に与える形式をとる傾向が強いが、どのようなときどのような傷害が生じるか、それを防ぐにはどうすればよいのかを生徒自身で判断できるように仕向けることに指導の重点をおく必要がある(たとえば右に組んで左わざをかけた相手は、左手をつくから危険である)。「指導上の留意事項」や「禁止事項」などの指導に際して教師の一方的な指導をできるかぎり避け、まず、ヒントを与えて生徒自身に考えさせ話し合いをさせ、自主的に留意点や禁止事項を見出させるように指導することがたいせつである。

12 授業実践結果—アンケート—

いままで実践してきた柔道の授業を生徒がどのように受けとめているかを知り、今後の指導の参考にすべく、アンケートによる調査をしたところ次のような結果であった。

柔道指導期間 昭和50年11月10日～12月25日 調査日 12月25日

対象 2年生男子 132名 (体育委を通じて帰りの学活時一斉実施、無記名)

この学年は、昨年度、今年度と2年間私の指導が続いており、質問内容も1年目のものが含まれている。

質問1. 柔道の授業を始める前、どんなことを考えていましたか。

- | | |
|------------------------------|----|
| (1) 1対1で投げあうのが、おもしろいので楽しかった。 | 41 |
| (2) 投げられると、痛いのであまりやりたくなかった。 | 54 |
| (3) 柔道衣をきて、思いきりあばれたかった。 | 33 |
| (4) その他 | 4 |

質問2. 柔道の授業を終えて、どういうことを感じましたか。

- | | |
|-------------------------------|----|
| (1) 柔道衣をきて、1対1で投げあうのがおもしろかった。 | 47 |
| (2) お互いに投げたり、投げられたりしたのが楽しかった。 | 75 |
| (3) 投げられると痛いのでつらかった。 | 5 |
| (4) その他 | 5 |

質問3. 柔道の授業中で、とくに楽しいし、おもしろいと思ったのはどれか二つえらびなさい。

- | | |
|-------------|---|
| (1) 柔道衣のきかた | 8 |
|-------------|---|

(2) 基本練習(受け身, 体さばきなど)	2 4
(3) 応用技能の練習	4 6
(4) 自由練習(お互いに投げあう)	1 1 5
(5) 試合練習	6 4

質問4. 3と反対につまらなかったもの, おもしろくなかったと思ったのはどれか。3に示した(1)~(5)の中から二つえらびなさい。

- | | |
|---------|-------|
| (1) 9 6 | (4) 9 |
| (2) 8 7 | (5) 9 |
| (3) 2 2 | |

質問5. 授業で行った柔道のわざの中で自分がいちばん上手に(とくに)なったと思うわざは, どのわざか一つえらびなさい。

<投げわざ>

ア 大腰	2 4	イ つりこみ腰	5	ウ 大外刈	3 5
エ 大内刈	7	オ 体落し	3 2	カ 出足払い	2
キ 小内刈	2	ク ひざ車	5	ケ ささえつりこみ足	6
コ 払腰	4	サ はね腰	4	シ 送り足払い	2
				無答	4

<固めわざ>

ア けさ固め	9 5	イ 上四方固め	1 6	ウ 横四方固め	8
				無答	7

質問6. 5であげたものの中で, 一番むづかしいものはどのわざか, 一つえらびなさい。

<投げわざ>

・はね腰	5 3	・払腰	2 1	・ひざ車	1 8
・体落し	7	・つりこみ腰	7	・ささえつりこみ足	7
・小内刈り	5	・大内刈り	4	・出足払い	3
・送り足払い	2	・大外刈り	1		
				無答	5

質問7. あなたは柔道の授業でけがをしたことがありますか。

- | | |
|------|-------|
| ア ある | 5 |
| イ ない | 1 2 7 |

あると答えた人は, 具体的にかいて下さい。

- | | |
|-------------------------|---|
| ・ 固めわざのとき, ひじやひざをすりむいた。 | 2 |
|-------------------------|---|

- ・ 医者には、いかなかったが、足首のところをいためた。 1
- ・ 投げられたとき、受け身の仕方がわるくて、ひじのところをいためた
が2～3日そのままにしているも治った。 2

質問8. 柔道指導の授業全体を通じての感想をかきなさい。

- ・ 後述のとおり

13 結果の考察

(1) 柔道の授業を始めるまえ「楽しみだった」「あばれてみたかった」という生徒が約56%、授業を終えて「投げあいするのがおもしろかった」「楽しかった」という生徒が約90%に増加した。反面「あまりやりたくなかった」が約41%から約4%になったことは、生徒に柔道ということがある程度理解されたと思っている。その他では、もっと長い時間やりたかった、とてもためになった、投げるのはよいが投げられるのがいやだった、私に柔道ができるかどうか心配だった、などがあった。

(2) 授業中とくに楽しいでは、自由練習をあげたものが87%あり、柔道のおもしろさとは、投げたり投げられたりというところにあるようだが、反面授業中おもしろくないものとして、柔道衣のきかたや基本練習が約70%と多くいるが、互いに投げあいができ、楽しく学習をすすめられるまでの過程として、これらの学習が不可欠のものであることを生徒に理解させる必要がある。とくに礼儀を重んずるという精神は体育の授業でも部活動でも同じであるから、今後大切なことを強調していきたい。

(3) 学習したわざの中で、いちばん上手に(とくに)なったものとして、約23%が大外刈、体落とし、大腰をあげているが、大腰は基本のわざとしてじゅうぶん時間をとり、大外刈り、体落としと発展させていく方法をとったのでこのような結果がでてきたと思われるが、大腰と同類のつりこみ腰が以外と少なかったのはうなづけない。体落とし、大外刈りと前や後ろにたおすようなわざを習得することにより、連続わざに発展できるので今後の授業がすすめやすい。

(4) いちばんむづかしい、苦手なわざとして、はね腰、払腰、ひざ車はいずれも、片足でささえて相手を投げるものをあげている。はね腰、払腰は腰のひねり、腕のひきがむづかしく、ひざ車はからだのさばきと腕のひきがむづかしく、自分の姿勢もくずれやすいので、生徒にはむづかしいのであろう。はね腰などこの系統のわざが上手になるためには、もう少し時間をかけて、かかり練習や約束練習をじゅうぶんやらせることが必要であると思う。

(5) 固めわざは、けさ固めが約80%あげられているが、1年生のとき最初にやり、比較的時間をかけ、けさ固めより、上四方固め、横四方固めへと発展してきたので、最初のものがやりやすく得意になったものと思われるが、中学生期には、このわざが合うようである。(県下柔道大会の固め技のうち80%ちかくが、このけさ固めで決っている。)

(6) 安全については、約4%のけが人がいたが、医師に治療を受けるものでなく、それぞれ4～5日程度で治ったので、私のモットーは、「けがをさせるな、するな」であるので、安全面からすると一応目的を達成できたと思うが、しかし、この面については、決しておろそかにせずなお一層の努力

をしていかなければと思っている。

(7) 生徒の感想文から

。「1年生のとき基本動作、投げわざなど一通りやったので、2年生に教わるのが待ち遠しかった。2年生になって、相手の動きによってどんなわざをかけたらよいかを教えてもらい、だんだん実践的になってきたので、たのしくなった。2年の柔道の学習を終えて、いちばん感じたことは、柔道は痛いというが、それはほんとうに柔道をやっていない人がいるのであり、一度でも柔道をやったことのある人なら、投げる方も気持ちいいし、投げられる方も気持ちのよいものだということがわかると思う。とにかく柔道をやって、からだがじょうぶになったような気がした。」

。「最初やる前は、やるのがこわかったが、今考えてみると男のスポーツとして、楽しく勇ましいものに思える。相手を投げたときの快さやおさへこみにかかって、ぬけ出そうとするあせりは、やらなかった者にはわからないほど、ほくたちにとっては楽しかった。でも試合のときは、自分の頭にえがいていたように相手は動いてくれなかった。でも柔道をやってから、とつ然何かのはずみでたおれたときやスケートでたおれたときは自然に受け身ができるので、これからの生活にも大いに役立つだろうと思っている。

。「ほくは、はじめ柔道を小学校のとき、テレビで「柔道一直線」というのを見てとてもやりたくてたまりませんでした。しかし中学生になって部活動を決めるのに柔道室をみてみた。投げあっており、大きな音の受け身がきこえた。とても痛そうであったし、自分は軽い方なので、投げられるのが決まっていると思い柔道部はやめた。また1年のとき受け身を知らないで体落しをかけられ、これですべてに柔道はきらいになってしまった。

1年の体育の教材で柔道をやるといわれたときはとてもやだった。しかし受け身をはじめて習ってからだんだんおもしろくなってきた。1回だけだがコンクリートの上で自転車でひっくりかえったとき受け身をして頭を打たなかったので助かったこともあった。

2年になって、いろいろな連続わざや動きも教わり、終わりのころやった試合が忘れられない。柔道をやってよかったな——と思いはじめてきた。」

14 まとめ

柔道は個人の体位や体力などの特性によって、対人的技術適応や活用の仕方が違ってくる。したがって、指導要領に記載されている15種類の技術を平均的に身につけさせることは難しい。

そこで、ここでは内容精選を指導法の改善という観点から述べてみた。すなわち、技術内容は従来通りであるが、

(1) 体さばきと関連させ1～2年ですべての対人的技術(単独)を与え、自分の特性から適した技術を選ばせて、習熟させる。

(2) 学習をできるかぎり対人という場で行う。そのため班編成を考慮した。

(3) 柔道は、危険ということからを排除すべく事故防止ということに力点を置いた。

以上のことを昨年度と今年度実施し2年目の成果としてまとめてみた。安全面と合わせてまだまだ問題点はあるが今後は評価と結びつけて研究していきたい。

評

格技（柔道）の学習における事故が少くない現在、本テーマのように学習指導法の研究推進がなされていることに対し、敬意を表したい。

特に、本研究でとり上げている安全指導の観点に立って、柔道の効果的な指導を実践するために、生徒の実態は握に基づき、技能構造の分析や学習過程の改善、更に、学年別技術のおさえをしていることは、大いに参考にしたい。

今後は、事故防止のための留意点、安全確保のため特に配慮する事項等が、学習指導の展開例とともに具体化されたならば一層よいのではないだろうか。そのためには、生徒の意欲の問題とかかわりあいのある評価の仕方が考えられると思うので、研究の継続を望みたい。